

不思議なものだ。走り出すまで、それほど暑さを感じなかったのだ。でも、走り出した瞬間に「あ、これはヤバイ」とわかった。「しまった、どうやらハイヒールで富士山に来てしまったぞ」

バッドウォーターでは、半マイルとか1マイルごとにサポートカーを停めてクーリングしているらしいとは聞いていた。でも、それを聞いても「なんだそれ？ 格好悪い」くらいにしか思わなかったのだ。だから、サポートクルーには、まず3マイル地点で待っていてくれと指示してスタートした。

1マイルも行かないうちに、すべてが崩れた。ここに来る前、ハワイで10日間の暑熱順化合宿もしたのだが、暑さのレベルがまったく違った。

「暑すぎる。死んじゃう」そう思ったときに、

「やあ、マイ・フレンド！」

とうるさく話しかけてくるアメリカ人がいた。頭には「神風」と書かれた鉢巻きを巻いている。

「やあ、キミのゼッケンもゾロ目だね。僕もゾロ目、一緒だね。これはきつと運命だ

よ

こっちはもう必死なのに、変なものにつかまっちゃった。適当に相槌を打つが、延々としゃべりかけてくる。こちらがピンチでパニックになっているとは気づきもしない。どうやらこのジミーという青年、サンタモニカに住んでいて、1500人くらいの大規模なランニングチームを運営しているらしい。

そういえば、レースの注意書きにサポートには霧吹きが必要と書いてあった。でも「アイロンがけするときの霧吹きなんて何の役に立つ？ あんなおもちゃみたいな必要ないだろう」と、サポートとして同行する妻の里奈と通訳兼ドライバーでもある根本務君とでいぶかしんでいたのだ。だが、ほかのチームを見て納得した。農薬散布用の噴霧器のことだったのだ。それを2台用意して、ランナーの前とうしろから同時にブワッと吹きかけている。

ジミーが自分のサポートクルーに「ノブにもかけてやってくれ」と指示し、冷却してくれたおかげで、干上がる前に3マイル地点で待っている僕のサポートクルーと接触することができた。

長袖に着替え、首に保冷剤を巻き、2リットルの氷入りの水を頭からかぶった。レ



ース中に水をかぶったのは初めてだ。サポートクルーがふたりというのも参加ランナー中最少人数。なかには15人くらいのスタッフを抱えているランナーもいる。そしてほとんどのチームは伴走役のクルーもいた。

トラックにバスタブを積み、体を冷やすための氷水をたたえているチームもあった。血液は43度くらいで凝固が始まるので、体温の上昇は命の危険をとまなう。

このレースは、月間に1000キロ走れるといった走力という次元ではなく、厳しい自然環境に順応できる体かどうかが問われているのだ。サポートに集中するあまり、里奈に熱中症の症状が出た。僕が使う水の量が予定よりも多いので、水を絶対に切らせてはいけないと、走っていない自分が水を使うことに抵抗があったようだ。

スタートしてからゴールまでほぼ一本道。分岐はゴール手前の20キロ間に2つしかないから道をロストすることはまずない。

遠くに大嫌いな犬が見えた。

「1キロくらい先に、白と黒の犬がいるから追っ払ってきてくれ」

「白い犬が元気に飛び回っている。ヤバイよ、ヤバイよ」

幻覚で僕の苦手な犬が現れたのだ。

「いや、いないよ」とサポートクルーはいわない。「わかった、見てくる」といなくなった。

陽が傾いてきた。青、赤紫、藍色、群青色、空の色がダイナミックに変化する。暗くなっても焼けたアスファルトが熱を放つ。なかなか気温が30度以下に下がらない。夜も暑くてクーリングが必要となる。

「チェックポイントまだ？」

とサポートクルーに尋ねる。会うたびに聞いているのだが、僕自身聞いたことを覚えてはいない。

「道、合っているの？」

「もう少しだから」

「通り過ぎてない？」

「過ぎてない」

そういえば、里奈が最初にスパルタスロンを完走したときも同じようなことをつぶやいていた。苦しいときはみんな同じ反応を示すようだ。やっぱり「あと何キロ？」と聞いてしまう。「あとちょっと」とか曖昧な答えが返ってくると「ちよっとつてどれくらいだよ！」と当たり前散らしていた。本当に理不尽。われながら嫌な奴だ。



痛み、睡魔、幻覚、痛み、睡魔、幻覚……。

ゴールまであと50キロ。標高1300メートルぐらいまで登ってきたから、吹いてくる風も少し涼しい。到着がものすごく遅い時間になるのは確実だったので、サポートクルーのふたりには先にゴール付近に行ってもらうことにした。

「ここから先はもう自分ひとりで大丈夫。先にローンパインに行つてホテルに事情を話して、チェックインして、荷物も入れてきちゃいなよ。ローンパインで待つてい」とふたりに告げた。歩き続けたことと、気温が下がったことで体も気持ちも余裕が出てきた。

ふたりが邪魔だったわけじゃないけれど、この荒野のなかにひとり放り出されて、地球をひとり占める気分を味わってみたくなったのだ。動くものがまったくなくて、岩だらけで、音もまったくない世界を、純粹にエンタテインメントとして堪能したかったのだ。

そこからはひとりの時間を充分楽しんだ。星がすごい。夜空を見上げると、びゅんびゅん流れ星が飛んでいる。宇宙に生きていることを感じる。星や闇の濃淡で地平線

と空の区別がつく。もうそれだけでなんかうれしい。ただ、暗いから、ここがどうい
う景色かはまったくわからない。真っ直ぐな道なのでヘッドライトすら必要ない。

遠くに、北米大陸最高峰のホイットニー山の頂がシルエツトで見える。ここはさつ
きまで50度以上あったのに5度くらいまで下がっていて、山頂には雪がうっすらと光
っている。頂上は4418メートル。富士山より高いのだから当たり前だが、た
だただ、「すごい」と思った。

あの山の麓がローンパインだ。

ゴールまであと21キロ地点。残すはハーフマラソンの距離となったところで、真っ
暗闇のなかでもすごい水の音を聞いた。ホイットニー山からの雪解け水が滝のごと
くバシャバシャと音を立てているのだ。清流とか溪流ではない。ゴーゴーと唸るよう
な激流。人って水の音を聞くとこんなに安心するんだなあと実感する。さっきまで乾
ききった砂漠にいたからだろう。やっと人の住むところに生還したというか、戻って
きたという感じに包まれた。

それは地理的なものじゃなくて、精神的に戻ってこられたという感じだ。たぶん今
まで絶対的に欠けていたものが水だったのだ。豊富な水の存在を感じたときに、もう



言葉では表現できない感覚が襲ってきた。「生きていた！」では、たぶんない。何か足りないジグソーパズルの大事なピースが1個人入ったような、生命の原点とでもいべき何かを感じて。「ああ、戻ってきた」という安堵感がわいてきた。

生命を感じさせない、死の谷を走ってきたからだろう。水の音は、人間が生きられる場所。食べ物があって、家があって、町があって、だからこそ人は生きられるのだ。つくづくそう思う。

ロインパインでサポートクルーが迎えてくれた。ゴールまではもうすぐだ。

ゴールでは主催者のクリスが迎えてくれた。写真撮影してバックルをくれた。48時間以内にゴールした人の記念品だって。ああそうか、48時間以内でゴールできたのか。

丸一日、25時間くらいでゴールするつもりが、着いたのは翌々日の未明。スタートが午前10時だから、42時間かかった。

「2010年7月 当時の記録より」